

「女性医師相談窓口」設置の提案

善 成 敏 子

善成病院

(平成13年10月26日受付)

私は卒業後丸6年で育児のため、医局のローテーションをはなれて、善成病院の常勤となっている。

当時には「心ならずも」というところがあったのも否定できないが、それまでの公立病院勤務時代は、医師の仕事をし、かつ、子供を育てるということが独身時代には、想像もできなかったいへんなことであった。我が子の顔をみつめながら、「こんなはずじゃなかった」とか「この子さえいなければ……」と、つい思ったこともあった。

幸いにして、夫と私の両方の母親が、健在で、しかも私どもの近くに住んでおり育児に協力してくれたので、助かった。しかし、困ったのはやはり、子供の病気や急な呼び出しという予測しがたい事態と、遅くなる帰宅時間であった。いつもは保育所にあずけても、熱が出ていたりすると、あずかってもらえない。上の子が保育所へ行き出した1歳半頃は、月の半分は、病気で休んでいたし、保育所の送迎、子供の晩ご飯ももちろん「おばあちゃんまかせ」という状態であった。

私が善成病院に勤務となってからは、子供の病気の時は、患者として入院させた。自分の枕をかかえ、お気に入りの毛布をもって、病棟へやってくる姿には心が痛んだが、治療が十分できるし、食事の心配もいらなし、看護スタッフがよくみてくれるので、私は、その日その日の医師の仕事ができずいぶん楽になった。

また、出産、育児を経験し、周囲に助けられながら仕事を継続できたお蔭で、女性職員を雇用していく上で、母性保護、パート労働など、各々の職員のおかれているその時々状況をふまえ、細かく対応することができ、良質の女性労働力の確保ができていると自負している。

雇用者側からいうと、「仕事になれて、これから...という時に、結婚して、子供ができてやめてしまう。」となげくことは、働く側からいうと「子供ができると働きにくい職場」を意味する。女性医師の立場から、自分の病院の内部に対して、女性の労働環境に配慮することが、とりも直さず、病院全体のサービスの質を維持していく近道ではないかと考えるようになってきた。

女性医師が増えてきている現在、若い先生達の前には、いろんな選択肢がある。どこで仕事をしようとも、どのような道を選ぼうとも、女性医師が満足いく仕事が続けられるよう私たち医師全体でのバックアップ体制づくりが必要な時期がきているのではないであろうか？

個人的な意見であるが、今回このような機会を与えていただいたことに感謝し、女性医師の「情報発信源」づくりを推進できればと思う。

県医師会に「女性医師相談窓口」の設置を提案したい。「なぜ、女性医師だけの窓口？」と問われるかもしれないが、まだまだ医療界においては現在の女性医師、女子医学生の増加に見合うだけの体制が形づくられていないからである。

インターネットを利用し、たとえば「勤務時間や曜日に制限があるが仕事をしたい」とか「いいベビーシッターは、いないか」とか、「保育所は？」又「子供が病気の時は？」とかというような、細かな情報が行き来をすることができればよいのと思う。

さらに、子供の養育が一段落したころ、親やパートナーの介護問題が私たち女性医師におそってくる。今後、とりくんでいかなければならない課題として、いつか、お時間をいただければと考えている。